

11月6日（月）草津養護学校を訪問しました！

対談テーマ

これからの特別支援教育について

草津養護学校における児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育実践や、「地域で共に生きていくための力」を育むためのインクルーシブ教育の構築に向けた取組等を見聞し、ニーズを踏まえたこれからの特別支援教育について対談しました。



訪問した教育委員

窪田 知子 委員 野村 早苗 委員 塚本 晃弘 委員

県立草津養護学校について



今年度創立 33 年目で知的障害と肢体不自由の子どもたちが在籍し、小学部、中学部、高等部を設置しています。「いのちを輝かせなかと共に豊かにたくましく生きぬく力を育てる」を学校教育目標とし、副籍制度や居住地交流、学校交流の他、地域や近隣企業との交流等に取り組んでいます。

意見交換より

委員：お子さんの成長の様子を保護者へどのように伝えていきますか。

学校：連絡帳や、電話連絡、送迎時、懇談等でお伝えしています。

委員：下校の様子を見て、事故が起きないように大変な苦勞をされていると感じた。支援学校で集団としての適切な規模はどれくらいだと考えますか。

学校：集団の大きさとして適切ではないと思う。感情の乱れた子に静かな落ち着いた場所でクールダウンさせることが難しい。新校舎ができたことで解消できると期待しています。

人数が多い分、学習において待ち時間が長くなり、一人一人に適切な学習環境を整えることが難しいです。

他の学部の子もたちの状況がほとんど把握できない状況。教員の数も多く、関係が希薄。小学部が体験学習で校外へ出ている時は中学部・高等部の子どもたちは比較的落ち着いていると思います。

委員：副籍や学校間交流等を進めるにあたり、準備段階での苦勞や教員としての手ごたえはありますか。

学校：居住地交流とは違い、副籍は制度化されたことで交流する学校へ行きやすく要望も言いやすいです。養護学校では見られない子どもの姿が見られることや地域の子もとつながりができるのが学校交流の良さ。課題としては引率する教員の負担。子ども40名が年に3回交流すると120回となる。学校間でお互いの行事の合間をぬって調整するので1日に2、3人が交流するとなると大変です。

学校間交流についてはコロナ禍の間、直接交流が難しく、本校の生徒が楽しめるおもちゃを製作・提供してもらうといった間接交流を続けてきました。居住地交流では相手校の担当者が変わると一から丁寧に進めていかなければならず、継続した取組が難しいです。